The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	踊りだす場の記述
Author(s)	菊竹, 智之
Citation	Communication-Design. 2016, 14, p. 19-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

踊りだす場の記述

菊竹智之（大阪大学大学院文学研究科（院生））

A Description about the Field Let Us Dance

Tomoyuki Kikutake（Graduate School of Letters, Osaka University）

今、様々な福祉や教育など現場で「参加型」のプログラムが取り入れられているが、人が何かに参加するとはどういうことなのだろうか。この問題を考えることは私にとって、対話での喋る人やダンスでのたくさん動く人、以外の人々とも活動を共にしていく方法を考えることにつながっている。障害者福祉施設たんぽぽの家で舞踊家佐久間新さんが行なうワークショップでは、踊りをやったことなどないような人々、しかも体を動かすのが不得意と思われているような人々が踊りに参加しだす。このワークショップの映像を視ることを通じて、人が何かに参加しているとき（あるいはそう見えるとき）、そこでは何が起こっているのかということを記述した。映像を視る際には、(1) 動きの少ないひとの動き (2) 場を満たす雰囲気 (3) 参加者間の視線のやり取り、などのことに注目し、微細な場の変化と参加者一人一人のあり方がどう結びつきながら変化していっているのか、ということを追った。

キーワード
ダンス、参加、障害者福祉
Dance, Participation, Welfare for the disabled

1. はじめに

この研究は、障害者福祉施設であるたんぽぽの家と舞踊家の佐久間新さん（以下Sさんと表記する部分もある）が共同で行うダンスワークショップについての哲学的探求である。この施設では月に2回佐久間さんがやってきて、少数のメンバー（施設利用者）、スタッフとともに即興ダンスを繰り広げる。彼らの持つ障害はさまざまで、身体が沢山動かせる人、身体を動かすのが難しい人、知的な障害を伴う人やそうでない人、ひとりひとり全く違った身体を持っている。その中で、特に振付をするでもメソッドを持ち込むでもなく、そこに現れる身体の動きを楽しむという活動が行われている。

とはいえこの研究は福祉という文脈に必ずしも乗ったものではない。ここでは人が人とともに何かを表現するという現象が起こっており、芸術か否か、障害者か否かという区分を超えた人の営みとしての面白みがある。私は、一人ではなく人とともに何かを表現することがどのようにして可能になっていくのか、またそこで何が起こっているのかということに非常

に関心がある。この問いはこのダンスWSだけでなく、ひろい意味での表現活動すべてに関わるような問いだと考えている。

私のWSに対する関心は以上の通りだが、その中でも今回特に探求を試みるのは、人々が何事かに参加するとはどういうことか、という問いである。現在、福祉施設や学校をはじめとして、利用者や生徒を単に受身にさせない参加型のプログラムが取り入れられようとしている。そのこと自体は歓迎すべきことだが、興味をもってもらえない、本当に楽しんでいるかわからない、楽しめる人とそうでない人が共存することなど、参加にまつわる課題は絶えない。また同時に、参加のあり方を視るすべが、よく発言したりよく動いたりしていること、もしくはテストで間接的に評価するなど以外に少ないことも問題だろう。

そうした様々な参加型のプログラムと比べてみると、たんぽぽの家のワークショップでの参加のあり方は非常に面白い。施設の性質上、そこではしゃべるのが苦手な人やたくさん動くのが苦手な人もいる。そうした中で、場を作っていくにはどうしたらいいのだろうか。

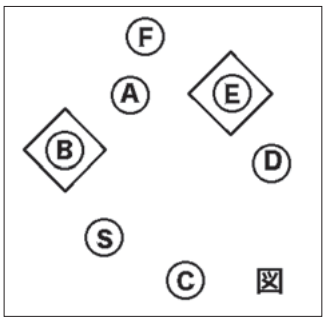
2. 研究方法と映像

本稿では、まだワークショップが始まって数ヶ月時点のワークショップの映像を見ながら、佐久間新さんとたんぽぽの家のメンバー（施設利用者）の参加のあり方をみていく。またそれを通して、ワークショップへの参加、プログラムへの参加に留まらず、人と人が共通の行為に参加するという現象を見つめていけたらと思っている。

映像から記述を起こしていくにあたって、現象学という観察の態度を取り入れている。現象学についての詳しい言及はここでは避けるが、端的に説明するのであれば、「私」にとって起こった現象について真偽や価値の判断を控え、その現象の起こりを記述するというのがその特徴である。ここでも映像を見た際の私の印象が記述の手がかりになっている。また記述の方法として現象学を参照すると同時に、身体の現象学の先駆者であるメルロ＝ポンティやB.ヴァルデンフェルスらの身体性についての記述を理解の支えとした。

参加という問いをあつかうため、今回はワークショップが立ち上がり、全員の「参加」がはじまるその瞬間を事細かに見ていきたい。取り上げる映像は2011年9月のもので、講師のSさんとその回初めてワークショップに参加したAさんが中心に映っている。私たちも、この二人のやりとりを中心に追っていくことを通して、周りの人々の参加の在り方を探っていく。

映像はその日のワークショップ開始間もなくのもので、Sさんと初参加のAさんとスタッフDさん、すでに何度かワークショップに参加したことのあるBさん、Cさん、Eさんが車座になっている（図）。そしてFさんがその外側から映像を撮っている。また、Aさんは言葉を理解するが言葉を発することが出来ず、他人の動作を模倣して動くことを好んでいる



図

ようである。注目した場面では、講師のSさんがAさんの方を見ながら音の出る様々な動作をして、Aさんの反応を探っている。映像の大筋としては、座った状態でのSさんとAさんの一対一のやり取りの後、一対一の関係ではなく、全体で一緒に動くような場面が現れ始める、という流れがある。これらのことを頭に入れた上で映像を見てみよう。本稿では映像の代用として末尾に映像中での出来事を描き起こしたもの（表）を付しているので、そちらと照らし合わせながら読んでいただけると幸いである。

3. 地に沈んでいく踊り

最初の場面で、講師であるSさんは他の参加者一人一人の方を順番に向いて、10秒程度ずつやり取りを交わすが、Aさんの番になるとやや長めの30秒やり取りを交わす。その後Sさんは2分間ほどのあいだ、Aさんから長期的に目を外さずAさんとやりとりをする。またSさんは、Aさんからわずかに目を外したとしても、Aさんが動けばすかさずそちらに視線を戻す。

ここから見えてくることは、ワークショップの開始にあってSさんがすべての人と何らかのやり取りを交わそうとしているらしいこと、そしてそれが基本的には一対一の関係で行われていることである。また、初参加のAさんとは明らかにほかの参加者と比べて長い時間のやり取りが行われている。映像の撮り手がSさんとAさんのやり取りを中心に撮っているためでもあるが、映像からは明らかにAさんの存在がSさんの意識の大きな部分を占めているとわかる。

それゆえ、Sさんが自らAさんから視線を外す場面は注目に値する。映像中にはSさんがAさんから視線を外す場面が、周りの音に対する応答などを除けば二度ほど見受けられるが、それらの場面には共通の特徴がある。そこではSさんとAさんが、「唇で破裂音を出す」あるいは「投げキッス」という共通の行為を一緒に反復しているのだが、両者の行為のタイミングが合ってきて、一致したところで、SさんはAさんから視線を外す。

この瞬間のAさんは映像中でとてもいきいきと見える。Sさんは様々な方法でAさんに音を出させようとしているが、Aさんはここではじめてはっきりとした音を出した。AさんはSさんの真似を続けてきたが、ここでようやくAさんの行為がそのうちに意味を宿し始めたのだと言える。それまでの場面ではSさんの目線が自分の方を外れるや否やAさんは時計をいじりだしていたのだが、ここでは行為を止めない。それはAさん自らが行為の意味を獲得したからだ。

その後、Ｓさんが左右に揺れながら両隣の人（ＢさんとＣさん）に交互に触れるという踊りを始めると、Ａさんもまた両隣の人に交互に触り始める。映像中ここまでＳさん以外とやり取りを交わしていなかったＡさんが、自分の両隣の人をしっかり見て触れている。ここではもはや単なる真似と言い得ない現象が起こっている。

「図と地」という人間の知覚構造からこの現象をとらえてみよう。図と地とはある意味のまとまりと、それを浮かび上がらせる背景のことである。人は知覚の地平の中で常にこの両者を保有しており、地と無関係に図が成立することはありえない。これをもとに考えると前半のＳさんにとってＡさんは常に意識の「図」であった。だが、共通の表現に身を浸していくことによって、Ａさんの身体に対する何らかの了解が生まれ、ＳさんにとってＡさんは「図」、つまり必ずしも注意してみる必要がないものに変わっていったと考えられる。

4. 雰囲気の中で

ここで二人の間に起こったこと自体も面白いが、それは別稿に譲るとして、ここではこの出来事を支えている「場」について考えたい。

これまでＡさんを中心に描写を進めてきたが、この間他の参加者たちが何もしていないわけではない。最初に書いた通り、Ｓさんは初め、一人一人とやりとりを交わそうと試み、参加者の多くもそれに応じている。ＡさんがＳさんの視線に応じて動いたり動かなかったりするのは、半ばはＡさんの性質によるものだろうが、この文脈に則ってのことでもあるだろう。つまり、この場では参加者たちがＳさんのもろもろの行為や関心を注視している。例えばＢさんは新参者のＡさんとＳさんとのやりとりを注意深く見守っているし、一見何も見ていなさそうなＥさんも、Ｓさんが自分の方を向いて何かするときにはほぼ確実にそれに応じている。Ｓさんはここでワークショップを立ち上げる人として存在しているが、それは役割だから仕事だからというのではなしに、周りの注目によってそういう存在として生まれるのである。と同時にＳさんの方でもそれを受けて、参加者たちにただならぬ注意を払っている。ＳさんはＡさんとやりとりを行っている間にも、物音や声があればすかさず応答している。

ＳさんとＡさんはお互いの関係が地に浸透していくまで飽くことなく真似の関係を続けるが、それはこのゆっくりとしていながら緊迫感のある（と、私は感じる）、時間の流れ、場の雰囲気の中ではじめて起こっている。もし仮に、周りの参加者がＳさんに注意を払わずに騒がしくしていたら、と考えると分かりやすい。参加者たちの動きに敏感なＳさんはＡさんとのやりとりに集中できなかったかもしれない。だとするとこの二人のやりとりは、Ｓさんそして新参者Ａさんを気にかける参加者たちのまなざしと、参加者の状態を気にかけるＳさんのまなざしの拮抗、それによってうまれる緩やかで緊張した雰囲気の中で生まれていると

いうことになる。

5. 促される踊り手

映像を一旦はなれて雰囲気についてもう少し考えてみたい。雰囲気とは基本的には意識や行為の具体的対象となるようなものではなく、意識の「地」になっている。だがその雰囲気の中で私たちは確実にある行為を「やりやすい」「やりにくい」「やりたい」などと感じている。私たちは雰囲気にもろもろの行為（しないということも含め）の判断を促されている。

促しということについて、現象学者ヴァルデンフェルスはメルロ＝ポンティの言葉を借りながら、それを事物（および身体）からの語りかけとして説明している[1)]。すなわち、ドアは自らを開くように、階段は自らを上るように、私たちに語りかけているというのだ。語るというのは比喩的な言葉遣いだが、ヴァルデンフェルスの指摘するようにこれは単なる比喩にとどまることではない。階段がそのディテールによって自らを登りうるものとして呈示しているのでなければ、「階段は上り下りするものである」定義を知らない人は永遠に階段を登れないことになるが、事実はそうではなくごく小さな子供ですら階段を上ろうと試みるのであり、階段の形状が私たちの上昇への興味を引き起こしているのである。そして促しとは決して事物からの一方的なものではなく、そこでは既に自分の潜在的行為可能性と事物の呈示する潜在性とのやりとりがはじまっている。階段の一段が塀ほどもあれば私たちはそれを階段や何か登るものとは思わないだろう。ほぼ無限に可能性が開かれている中である促しを受け取れるのは、私たちの身体が可能な諸行為をもって事物とやりとりをしているからに他ならない。その交渉の中で初めて「階段を上ろう」という欲求や目的がうまれるのだ。促しとは、単に行為のきっかけなのではなく、目的や欲求が形になるプロセスなのだ。

ダンスの中で促しがどう起こっているのか、先ほど参照した回のWSとは別の例を考えてみたい。ある日のWSでは、施設二階のテラスでダンスが行われた。テラスには外から二階に上がってくるためのスロープが続いている。テラスとスロープのどちらにもマットが敷かれ、それぞれで踊りが始まったが、その両者はしばらく交わらなかった。その日の振り返り記録にこうある。

> テラスとスロープの間にいてどちらで踊っている人に関わればいいのかわからず、引き裂かれる思いだった。その後人がスロープを行き来するようになり、全体が一つの長い空間として感じられるようになった。（菊竹）[2)]

ここで起こったことはなんだろうか。スロープからの通路としての促しは全くなかったわけではない。しかしマットがスロープとテラスとで繋がっていなかったことや自力で歩けない人と一緒に踊っていたことが、通路としての促しと拮抗する促しになっていたかもしれない。ヴァルデンフェルスも述べている通り、促しはほぼ無限の「余剰」[3] を持ち、一様に現れてくるわけではない。ある人が通路に促され往来を始めた。するとそれを見る人はそこに単に歩いている身体や歩くという意図を見るのではなく、その身体を動かした世界の促しを同時に見る。つまり、人の身体はそこにあるだけで、様々の促しを表現しているのである。この身体を通して、他者にとってはある促しが際立ってきたり、退いたりする。

ちょうど面白いことに、このときの筆者は、最初引き裂かれていた原因は「人」だと語りながら、変化した後についての語りでは「空間」について語っている。つまり、このときの筆者にとって、人が引き裂かれていることと空間として隔たりがあることはほぼ同じ意味を持っていたと考えられる。通路に促されて歩く人を見ると目は空間の縦の辺に沿った動きをするようになる。そうするとさらに向こうの人びとが目に入る。この目の動きが空間を通路に変え、人の距離を変えているのである。空間を通路として認識するということは単に通路という属性を発見するということではなく、その人も「通路的」に促されているということである。

このように踊り手は促しへの応答を通じて、他者の促し全体の布置を転換し、新たな空間を提示する。他の踊り手、例えば先の例での筆者は、別に意識はしないだろうが、両側の踊り手たちがつながり一緒に踊れる雰囲気になったと感じ、動き出す。このように、雰囲気の変化が踊りにそのまま現れる。

雰囲気とはつまり、人々の行為の中で出来上がってくる促しとやりとりの布置の総体のようなものだと言っていいかもしれない。「雰囲気が悪い」と私たちがいうとき、それは決して客観的な物言いではない。そこには自分が居づらいという個人的な感情が含まれている。私たちは雰囲気をその場に漂っているものだと感じるが、同時にそれは私たちの気分でもある。先に見た通り、促しはすでに世界と自分との関係だった。だから雰囲気は、場のものとしても個人のものとしても感じられるのだろう。逆に考えると、個人が常々感じている感情や気分の中にも既に場との関係が働いているといえる[4]。

6. 雰囲気でコミュニケーション

雰囲気への考察を元にもう一度映像に立ち返ってみよう。Sさんは初めの頃、Aさんと様々なやりとりを行いながら、Aさんと一緒にできる行為を探っていた。そして同時に周りの人々も初参加のAさんの行為を見守っていた。先ほど見たとおり可能な諸行為の交渉が

促しだったことを考えると、ここにすでに促しあいが発生している。また、促しの「語りかけ」という比喩を思い出すのなら、それは目に入った瞬間にもう作動しているということであり、つまりSさんとAさんを「見ているだけ」とうつるBさんも、すでにやりとりをはじめている。促しの布置は刻一刻と変わっており、ある促しは図へある促しは地へと沈んでいく。先にもAさんがSさんとの真似関係を基盤に他の参加者と関係する場面を見たが、ここではAさんはSさんに促された身体の動きによって、新しい促しへ体が開かれたと言えるだろう。こうやって参加者たちはお互いの行為によって形作られた雰囲気を地に忍ばせていく。彼らはいつの間にか自分たちで作った大地の上に立っている。

人の何かが他者を動かすというこの現象は十分にコミュニケーションと呼べるものだが、それはメッセージを伝達するというモデルで語られるようなコミュニケーションではなく、雰囲気という共同の形成物を通じた緩やかな促しあいである。直接相手に関わらなくとも、自分のアクションによって促しの布置が変わり、雰囲気が変われば、既にその人の世界、人との関係は変わっているのだ。

7. 参加の産場

最後に、初めに立てた「参加」という問いに今までの話を関連付けてみよう。

映像を詳しく見て分かったことの一つは、一見「何もしていない」あるいは「見ているだけ」に見えた人々も、SさんとAさんのやりとりの土台となる雰囲気をつくっていた。それらのまなざしは、まなざしを無視せずにそれと拮抗しながら現れてくる図、二人の踊りによって、意味ある参加となっている。参加はこのように、個人の意思のみによってではなく、促しを受け取る他者によって起こるものでもある。そして促しを受け取ることとは、頭で理解することではなく、身体的な潜在性とのやりとりが行われることなのだった。この受取るということを更に考えていくことで、単なる「何でもあり、何でも参加」ということとの違いを考えていけるだろう。

また、メッセージの伝達というモデルでは語れないコミュニケーションの在り方として、誰もが感じながら関与しづらい雰囲気というものについて考えた。人々の身体は雰囲気を発し、それによって促し合っている。これはしゃべることが難しい人たちや体を動かして何か発信することが難しい人たちの居る福祉の現場で特に重要になってくることであるし、実際多くのケア従事者が無意識に雰囲気を通じたコミュニケーションを行っていると思われる[5)]。

さらに雰囲気や促しとは、それとの交渉のなかで初めて行為の目的や欲望が形作られるような、その源泉だったことも思い出しておきたい。踊りに親しんだことのない人たちは、初めからこのように動きたいという欲望を持っているわけもなく、それはあのワークショップの

場でその都度生まれてきているのだ。しかしそれは同時ににわかのものではなく、確かにその人の身体が持っていた可能性に根付いている。参加者各自の欲望や思いを尊重するのは当然なのだが、しかしその前に、欲望や思いを形にしていくための協働作業が必要なのである。

註

1）『講義・身体の現象学』pp.402-405

2）2014年7月の記録より。一部言葉遣いの変更、単語の統一をおこなった。

3）前掲書 p.406

4）私の研究は場に関するものだと自称してきたが、それは同時に感情や気分についての研究になるのかもしれない。

5）例えば西村ユミの著作『交流する身体』

参考文献

B.ヴァルデンフェルス（2004）『講義・身体の現象学』知泉書館

西村ユミ（2007）『交流する身体』NHK出版

［表］「踊り出す場の記述」 使用映像のトランスクリプト

時間	S	A	その他の人
0:11	Bの方に体を向けて「うん、うーん」	カメラに映っていない。	B「うーん」
	Bとの間で「うん」を基調とした声のやり取り		
0:22	S「うん！」B「うへへへへへ」		
0:25	SそのままうんといいながらCの方へ顔・目線を向ける。顔を上げ「うーん」		
0:30	Eの方をしかめっ面で向いて、「うーん」		
	「うーん」を繰り返す。		E、Sに続いて「うーん」
0:40	「うーん」のリズムが変則的に、あわせて首も変則的に動く。		
	Cの方をみて、Cの声のリズムをまねして声を出す		
0:46	息をゆっくり吐きながらAの方へ視線を定め、		
0:47	「Aさーん」とささやき声で。その直後手を耳の横で動かす。		
0:51	Aに向かって「はー」と吐息をかける。		Bが一連のやりとりをながめている。
0:55	口に手をあて、Aに向かって「おーい」		
0:58	引き続きAに向かって「ふー」「はー」	カメラに映る。左手が口元にある。声や音は出ていない。	
1:03	両手を口に当て、拡声器のようにする。その状態で小さな声をAに向かって出す。	Sに続いてすかさず左手を添える。力が入っている。	
1:04	Aの方を向いたまま口の前で手を合わせて閉じたり、開いたりしながら、その動作にあわせて、手を開いたときに小さく声を出す。	Sが二度目の動作に入ったあたりから手を開閉し始める。開閉の軸となる指が異なる。	
1:12	上体と視線をAの方に向けながら、そちらに向かっていきなり低い声で「はい」と言う（それまでは小さなささやき声）。その瞬間Cは口から手を離し、体を少し後ろに倒す。	瞬間Aは口から手を離し、体を少し後ろに倒す。	
1:14	再びAの方へ向き、同じように手の開閉をしながら高い声で呼びかける		
1:17	S、手の開閉のリズムに緩急をつけて、開くのにあわせて「はい」というのを繰り返す。	Sにつづいて手を開閉し始める。	
1:21	Bが声を出したのを見てにやっと笑いながら一瞬そちらの方を向く		B反応して声を出す。
1:24	手を開くときに、顔から離し、手を広げる。手を戻して閉じると、	Sにつづいて両手を広げる。	
1:26	右手をおろし、左手だけで口を押さえる。その手の形のまま、腕をまっすぐAの方へのばしながら「おー」という。 同じ動きを繰り返す。	Aは両手を閉じたときの手を合わせた状態のまま、腕を曲げ伸ばし。	
1:31		Sの二回目の動作の途中で空中で片手に切り替える。	
1:32	Aに続いて、ただしほぼ同時に腕を自らの後ろへまわす。	のばした状態のその右腕を背中へ持っていきその手で頭をかく。やや下を向く。	
	Cの方から声がして、Sは声で応じながら、手を後ろにやった動作の流れでCの方を振り返る。		
1:35	S（おそらくAが手を口に当てている様子を見て）口の前で手を動かす。手を口に当てる瞬間にちらっとCの方をみる。	Sがこちらを向いているときも下を向いたまま。	
1:36	S、Cの方へ目線を戻しながら、手の動作を続ける。	腕時計に手を当てる。	
1:38		時計を触りながらSとCの動作をちらっと身、また下をむく	
1:41	Cとともに手の平を口につけたり離したりする動作を繰り返す。それをやりながら、目線をA経由でBの方へ。	Sの体の向きが変わると同時に、時計を触りながら顔を上げる。	
1:42		Sの方を向き自分のほほをペチペチとたたく。	
1:43	すかさず手をほほにずらし、自分のほほをたたく動作。体をAの方へ乗り出し、首を突き出すような姿勢。	一瞬手を口に。	

時間	S	A	その他の人
	S、さらに身を乗り出す。	ほほに手を戻したたく。	
1:46	Bが「やーねぇ」というと「や」のあたりでBの方を向き、口の前で手をばたつかせながら、こもった声で何か言う。		B「やーねぇ」
1:47	S乗り出していた体を引きながらAの方を向き一瞬動きを止め、		
1:48	口を叩いていた左手をほほにずらし、ほほをたたく。	たたく動作をしながら手を口に。再びほほに。	
1:50	ほほをたたくのをやめる。	たたくのをやめる。	
	反対の右手で反対のほほをたたく。	Sに続いて手を入れ替えてほほをたたく。	
1:52	ほほをたたきながら口を縦に開き、空洞音を鳴らす		
		少し口を開くが空洞音にはならない。	
1:58	口をそのまま、右手も添えて両手で両ほほをたたく。	Sに続いて、左手を添え、両手で両ほほをたたく。	
	たたくリズムが次第に急になる。視線を左右に動かす。		
2:06	リズムが落ち着いてくる。しっかりたたく。		
	顔のたたく位置を微妙に上下させながら音を変化させる。	Sに続いてたたく位置を微妙に変化させている。	
2:13	口を開いたまま、両手でデコピンのようにしてほほをはじき、音を出す。		
		デコピンのような動作を頬の横でしている。ただし親指と人差し指が十分には触れていない。	
	デコピンを繰り返しながらたたく位置を、下は首まで上下し、音を変化させる。	Sに続いて手の位置を上下。	
2:24	手の上下をやめ位置を固定し、今度は口の形を変化させながらデコピンを繰り返し、音を変化させる。	口がわずかに動いている。	
2:26	動作をやめ、手のひらでほほを二回たたく。	Sに続いて頬を手のひらでたたく。Sが次の動作にいっても続け、3回たたく。	B、SとAを交互に見る。
2:27	右手をおろし、口を開ける。左手であけた口をポンポンと二回たたく。	Sに続いて口を開け、手でたたく。	
2:28	手を下ろし、口を強く開閉して、唇でポンという音を繰り返し出す。	先ほどの手の動作を続けていたが次第に手の動きが弱まり、	
2:30		口を開閉する。音は出ない。	
	素早く連続で開閉していたが、舌をなめてから二度ゆっくり行い、しっかりした破裂音を出す。	Sに続いてゆっくり口を動かすと、破裂音が出る。	
2:35	繰り返していくうちにテンポが速くなる		
2:38		口で音をを出しながら頭の横を両手でかく。	
	目を丸くして少し身を引いた後、その反動を使って前に体を勢いよく乗り出して、口唇で破裂音を出す。	音が強くなる。破裂音をつづける。	
	しっかりためて、目を見開くと同時に破裂音を出す。		
	両者のが合ってくる。タイミングがあったまま3回繰り返す。		
2:42	そのまま破裂音を繰り返しながらCの方を向く。	下を向き時計を触る。口の開閉、破裂音を続けている。目線をおろしてから数度はSとタイミングが合っている。	
	Cの方を向いて破裂音を続ける。チラッと目線をあげたり戻したりする。	チラッと目線をあげたり戻したりする。破裂音は弱まるが続く。	
2:49	口で音を出し続けながら再びAを見る。		
		口の音に再び勢いがつく。手は時計に当てられたまま	

時間	S	A	その他の人
2:55	口を開き音を出すタイミングでBを見る。	一瞬視線が下がるがすぐにあげる。	
2:56	Bの方へ体を傾けて「パッ」、		
	反対に身を引いてもう一度。	時計に手をあてたまま口で破裂音。	
2:59	S、Aの方を見る。SもAも口の開閉を続けているが、どちらからともなく次第に間隔が短くなり、音も弱まっていく。		
3:03		視線を落とし、ずっと触っていた時計のボタンを押す。「ピッ、ピッピッピ」と鳴る。	
3:04	S、Aの方へ上半身を傾けながら自らの左手首を右手で触り、Aの時計を押す動作と同じような動きをして、口の破裂音で時計のリズムと同じリズムの音を出す。。	わずかに口をうごかしている。	
3:08	口の破裂音を続けながら、Eの方へ体を向ける。	体を後ろに倒し、そのまま体育座り。	
3:10	Eの方を見てせき。	体をまるめる。	
3:11	そのままの身体の向きでうなり声をあげながら上半身をEの方向へ傾けたり引いたりする。		
3:15	体を起こす。しかめ面でうなり声を出しながらAの方を向く。	わずかに起きる	
3:17	Aに向かって一度「うーん」。視線をEやBへ向けながら再び「うーん」。		
3:22	上体を起こしながらAを見つめて息を吸い、「ほー」		
3:24	体を乗り出して頭を傾けた姿勢でもう一度「ほー」		
	Aをじっと見ながら小さな低い声を繰り返しだす。声に合わせて首の運動をしている。	首をわずかに動かしている。	
3:38	視線をCの方へ向け、同じように声を出す。		
3:40	口をぱっと開き、吐息をもらす。	Sと同じタイミングで口をひらく。	
	色々なリズムで吐息を繰り返す。首・視線は様々な方向へ。	首をうごかす。	
3:58	Cの方を向いていたが視線がCからはずれ、Sは吐息を吐きながらAの方を向き、手を挙げる。		
		息を吐きながら体を倒し手を組み体育座り。	
4:00	S、Aがやっているのと同じように手を口に当てると、同時にCを見る。		Cが声を出す。
4:02	Cと一緒に声を出しながら、Cから視線を外す。		
4:04	一瞬だけAの方を見る。	体を起こし、口に手を当てる。	
		口に当てる手の左右を入れ替え、	
	Cを見て、		
4:05	再びはっとしたようにAを見る。	口の前で手を動かす。	
	S,「たたたたた」と声でリズムを刻みながら、手を口の前でバタつかせる。その動作をしながらCの方へ上半身を傾け、つぎにAの方へ体を傾ける。		
4:13	基本的には同じ動作を行いながら、口の形、手の動きを少しずつ変化させて音を変化させる。顔の向きCとAの間を往復。Cは手をうごかす。		
4:14	視線をAに固定し、手の平を上に向けて口の下に手を当てる。Aに向かってゆっくり息を吹きかける。		
		頬を掻いた後、Sと同じように手を上に向けて口の下に当てる。	
	同じ動作を繰り返すうちに、手首が上下動し始める。		

時間	S	A	その他の人
4:18	手のひらが口について音が出る。投げキッスのようになる。繰り返す。	同じように手首を口の下に固定したまま手のひらを上下動するが音は出ず。	
4:20		二度目の動作で音が出る。繰り返す。	
4:24		投げキッスのためのところで首をわずかにあげるようになる。	
	二人の投げキッスのタイミングが合ってくる。		
4:30	そのまま繰り返しながら、Bの方へ体を向け投げキッス。	繰り返す。	
4:34	きょろきょろしながら繰り返していた投げキッスのペースをゆるめ、		
4:37	手を下ろして「ほー」と言う。		
4:40		何度か投げキッスを続けたあと、手を下ろし、手を組む。	
4:42	CとAを交互にみながら「ばあ」。続いてあくびのような声と仕草。上半身を前後に傾けながら腕を曲げ伸ばし。		
4:49			Eの首が動く
5:02	あくびのような動作をつづけながら「ああ」。	上半身を前後に傾ける。	
5:07		腕を上に伸ばす。	
	動きを大きくしつつ反復。		Aも手の動きをする。Sの動きにあわせてBの首上下（みている？）
5:28	首を横に振る。		左記Sの動作と同時にEの首があがる
5:30	Aのまねのような仕草と声をしているとEと顔が向かい合う。		
5:32	Eを下から覗き込むようにしながら、「あー」という。徐々に口の開きと声を大きくしていく。		
5:42			EはSの声に続いて口を開き、「あー、あー」という声を連続で出す。首にも動きがある。
5:52	せき。せきのあと「あー」を再開。		
5:57		後ろに手をついて体を倒す。	
6:01		首にわずかな動き	
	S、首の動きを激しくしながら次第にEの方から目線を外し、		
6:09	上半身を前後に揺らし、Aの方を向きながら「あー」。	お尻を掻く。	B、Cの方を見る。
			Eのとりわけ大きい「アー」
	上体の前後運動を大きくする。声は大きくはなるも非常にゆっくり、のびのびしていく。		Eの声弱まっていく。
6:34	Eの声がなくなると、「ほー（裏声）、ほー（地声）」と非常にゆっくり言いつつ、声と首をAの方へふり向ける。		Eの声、聞こえなくなる。
7:00	同じような声を今度は上半身を前に傾けてAの方へ向ける。		
	ささやき。		
7:09	唐突に両手をあわせるようにパンと叩く。繰り返す。		
		両手をあわせるようにたたく。繰り返す。	A、D、両手をあわせるようにたたく。繰り返す。
7:16	手を裏返し、手の甲同士を打ちあわせる。		
		手の甲同士を打ちあわせる。	A、D、手の甲同士を打ち合わせる。
7:27	手を打つのをやめる。Sは左隣のBの手に触れる。		A動作をやめ手を口に当てる。Dもやめる。

時間	S	A	その他の人
	左隣のBの方へ体を傾け手を伸ばし、Bの右手に触れる。	手を打つのをやめ、右隣にいるBの方へ手を伸ばし、Bの左手に触れる。	
7:33	体を反対に傾け、右隣のAの方へ手を伸ばす。Bの手からは離れる。		CはSが手を伸ばしているのを見るととすっと手を出す。
	右手とCの左手でタッチ。		Sの右手とタッチ。
7:35	そのまま揺れるようにしてAから離れ再びBの方へ体を傾け、触れる。		Cは離れた手を自分の口に当てる。
7:39	再びCの方へ。	それまで触れていたBと反対隣のEに手を伸ばし、車いすに触れる。Bには触れたまま。	D、それまで触れていたEとは反対隣のCの方へ、Eには触れたまま手を伸ばすが、Cには届かない。
7:42	隣の二人からは手を離し、膝立ちで正面のEに近づき触れにいく。Eの左膝に触れる。		それまでEに触れていたDがすっと身を引く。
		Eの右膝（Sが触っていない方）に触れる。	